HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	項の脱落とPASSIV：θ－構造・格付与から解明する
Author(s)	神, 久聡
Citation	独語独文学科研究年報, 13, 55-70
Issue Date	1987-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25743
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P55-70.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

項の脱落とPASSIV
── θ-構造・格付与から解明する ──

神　　久聡

0. 序
1. 用語といくつかの原理・原則
2. 項をブロックする、ブロックを解除する / **Partizip Ⅱ・zu・haben・sein** の役割
3. 受動の定義
4. 準助動詞 **bekommen, erhalten, kriegen**
5. まとめに代えて

0. 序

ドイツ語の受動文、受動内容の文を捉えようとすると、文型上は受動態受身文や能動態受身文があり、文型だけでは把握しにくそうである。ではそれぞれの受身文を受身文として成り立たせている統語上の仕組みはどうなっているのだろうか。またREZIPIENTENPASSIV[1)]（Helbig/Buscha）とよばれる受身文（bekommen, erhalten, kriegen＋Partizip Ⅱ）[2)] は統語面からどのように分析されるのだろう。

Rezipientenpassiv の文1）は、受動態で示されている文2)とパラフレーズの関係にあるとされ、

1) Er kriegte ein Buch geschenkt.（彼は本をプレゼントしてもらった）
2) Ihm wurde ein Buch geschenkt.

1）のEr（主語、1格NOMINATIV）と2）のihm（3格DATIV）は同一の役割（本〔＝テーマ〕の移動先〔到着点〕）を示す名詞であると解釈される。辞書では jm et schenkenで示される間接目的語のjm（2ではihm）が、1)の構文で1格主語に格を変換したのだろうか、あるいは動詞kriegen に特別な働きがあるのだろうか。

Haiderは "Fehlende Argumente：vom Passiv zu kohärenten Infinitiven"（1986）で、受身文一般にある種の項（Argument）が減っている－つまり具現されない－という現象に焦点をあて、広義の意味での受動文の統語面のメカニズムを解明し、Rezipientenpassivに

ついても分析している。本稿ではHaider(1986)で用いられている原理・原則などを確認しながら受動文のメカニズムを紹介したい。

1. 用語といくつかの原理・原則

〔項(Argument)〕

動詞(あるいは形容詞)が取るべき構成名詞句(NP)のこと。例えば動詞helfenについては、

3) Der Gast half dem Kind. (客が子供を助けた)

のように、主語の1格(Nominativ)名詞句(der Gast)と3格(Dativ)目的語の名詞句(dem Kind)が「項」と呼ばれる。これに対して、3)に対応する次の受動態4)で、虚辞の(expletiv)"es"は項ではないとされる。[3)]

4) Es wurde dem Kind geholfen.

〔構造的項(strukturelles Argument)と語彙的項(lexikalisches Argument)〕

例えば動詞schlagen(殴る)は2個の項をとる動詞である。能動態5)とそれに対応する受動態5')で、

5) Die Frau schlug den Mann. 5') Der Mann wurde (von der Frau) geschlagen.

4格(Akkusativ)目的語が1格(Nominativ)主語に格の変換を起こしうるような項、あるいは、文の1格主語になる項を「構造的項」という。一方4)のdem Kindのように、受動態に変換しても格の変化をおこさない項を「語彙的項」という。動詞schlagenは2個の構造的項を持ち、helfenは構造的項と語彙的項を1個ずつ持つ動詞である。

〔θ-役割(θ-Rolle, thematische-Rolle)〕

動詞の意味に直接寄与する文の要素がそれぞれ分担する役割(毛利:1986,『言語』)のこと。動詞schenken(プレゼントする)には、「プレゼントする行為者」と「プレゼント受領者」、及び「物としてのプレゼント」という役割関係にある三者の存在が認められる。それぞれ順に、「動作主体」、「(プレゼントの)到達点」、「テーマ(主題)」という意味的役割であるが、このような役割を広く「θ-役割」といっている。次の文6)でそれぞれのθ-役割を担っている名詞句(項)がAnna、ihm、ein Buchである。

6) Anna schenkt ihm ein Buch.

この意味的役割は、述語と結び付く項には付与されていなければならない。

〔 θ-Kriterium (θ-基準) (Chomsky：1981：36) 〕

1つの項は θ-役割を必ず1つだけ持ち、また1つの θ-役割は、必ず1つだけの項に付与される。この基準はD-構造(旧モデルの深層構造にあたる)でも、S-構造 (旧モデルの表層構造にあたる) でも保たれていなければならない。例えば、文6)で「到達点」の θ-役割を持つ項 ihm が他の θ-役割 (例えば、「動作主」) を付与されることはない。あるいはある θ-役割 (「到達点」) が別の θ-役割 (「テーマ」) に変わるということもない。もし二重に付与されるようなことがあれば、この基準に違反することになり、非文、不適格文として排除される。

〔 格の付与について 〕

格の付与については次のように定義される (Chomsky、1981：170)。

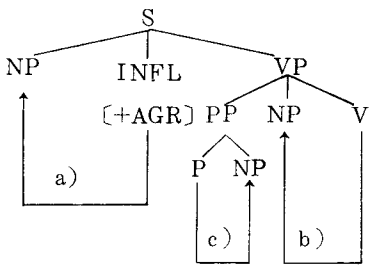
a) AGR に統率 (Govern)[4] されている NP は主格 (NOMINATIV-Kasus) を付与される。

b) 他動詞に統率されている NP は目的格 (OBJEKTIVE-Kasus) を付与される。

c) 前置詞に統率されている NP は斜格 (OBLIQUE-Kasus) を付与される。

上の a), b), c) が図の a), b), c) に対応している。

7)



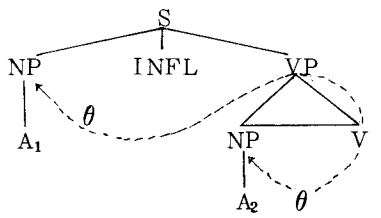
INFL (Inflektion) は時制、呼応(Agreement) 法助動詞などからなる要素である。 AGR は人称、数、性の呼応に関する素性を全部含むものとし、 AGR は定形節(文)におきる。

〔 格フィルターの原理 〕

音形を持つ NP は必ず格を持っていなければならない。音声形式がありながら格をもたない (付与されていない) NP があればその文は非文となる。

〔 externes Argument・internes Argument 〕

8)



他動詞 schlagen (殴る) は4格の目的語をとる動詞である。 VP の Head によって格の指定を受ける項 (A_2) は interres Argument (internal Argument) と呼ばれる。一方 INFL (AGR) に統率される項 (A_1) は externes Argument と呼ば

れる。θ-役割はA_2に対してはVから直接に、A_1にはVPを通して間接的に付与される（Peter Sells, 1985：35ff.）。

〔Realisationsprinzip＝RP(Haider, 1986：9)〕

構造的メルクマールの具現とexternな項の存在との関係を示す原理。

"Wenn ein funktionales Element F mit der Merkmalmenge M ein strukturelles Merkmal f realisiert, dann gibt es ein externes Argument."

（メルクマールの集合Mをもつ関数要素Fが構造的メルクマールfを具現するならば、1つのexternな項が存在する。）

つまり、関数要素（動詞）が構造的項をとると指定されると、それがとるべき項のうちの1つがexternな項として具現する、という原理と理解される。

例えば、構造的項を2個とる動詞schlagenでは、その2個の項のうちのどちらか一方がexternに具現することになる。さらに、ankommen(到着する）は1個だけの構造的項をとる動詞であるが、このような動詞の項は、RPに従うと自動的にexternに具現し主語位置にたつことになる（ankommenについては59頁以下参照）。一方、動詞schlagenの場合には、次項のDPの適用を受けてexternの項が指定される。

RPの原理は常に構造的項が対象となる（Haider, 1983：60参照）。

〔Designationsprinzip(Haider, 1986：10), Designierte Argumente(DA)〕

関数要素が1つ以上の構造的であることを示すメルクマールを付与するなら、1つの"extern"と指定されたメルクマールが存在する。（"Weist ein funktionales Element mehr als ein strukturelles Merkmal zu, so gibt es ein als extern designiertes Merkmal."）

例えば動詞 schlagen の場合、2つの構造的項（A_1, A_2）のうち1つが特にexternに具現することの指定をされている、と解釈される。そのように指定された項をDAといい、θ-役割が付与される項でもあって、($\underline{\theta}$)と表示する。

例: schlagen：V($\underline{\theta^S}$; θ^S)、 schenken：V($\underline{\theta^S}$; θ^L; θ^S)　　S：構造的、L：語彙的

〔助動詞の選択(Haider, 1986：10)〕

DAが存在するならば haben を、DAが存在しなければ sein を選択する。

($\underline{\theta}$)と表示される項(DA)を持つ動詞は助動詞に haben を取り、その項がなければ助動詞にseinを取るという条件の事。

〔補足説明〕

ドイツ語では完了文をつくる際に、「場所の移動や状態の変化」などを表す自動詞に限ってseinを選択し、その他の自動詞とすべての他動詞にはhabenを選択するという制約がある。さて文で主語として（INFL. AGRからNOMINATIVを付与されて）具現するのは構造的項に共通することである。そこでこの項を持つ動詞がどちらの助動詞と結び付くかということが、上記の表示の方法で指示できる。具体例で確かめておく。例文にはHaider（1983：78ff.）の引用も含む。

まずjm zustoßen（彼に不幸がふりかかる）、とjm helfen（男性が子供を助ける）の例をみる。それぞれ（θ^S, θ^L），（$\underline{\theta}^S$, θ^L）という項構造が与えられる。前者はseinを、後者はhabenを取る動詞である。

＊印は非文であることを示す。

9) Ihm stößt ein Unglück zu.

10) Ihm ist ein Unglück zugestoßen.

11)＊Ihm hat ein Unglück zugestoßen.

12)＊Ihm wurde ein Unglück zugestoßen.

13) das ihm zugestoßene Unglück.

14) Ein Unglück zugestoßen ist ihm noch nie.

15) Unglück zugestoßen ist ihm keines.

9') Dem Kind hilft der Mann.

10')＊Dem Kind ist der Mann geholfen.（完了）

11') Dem Kind hat der Mann geholfen.（完了）

12') Dem Kind wurde geholfen.（受動）

13')＊der dem Kind geholfene Mann（付加語用法）

14')＊Ein Mann geholfen hat ihm noch nie.（前域での主語＋過去分詞）

15')＊Mann geholfen hat ihm keiner.（前域での主語＋過去分詞）

同様の関係はankommen（到着する）とtanzen（踊る）にも見られる。どちらも項を1つだけ取る動詞である。

16) der angekommene Linguist

17) Ein Linguist angekommen ist bisher nicht.

18) Linguist angekommen ist bisher nicht.

16')＊der getanzte Linguist.

17')＊Ein Linguist getanzt hat bisher nicht.

18')＊Linguist getanzt hat bisher nicht.

9)-18)を許す動詞はergative Verben[5]に見られるとされ（Haider, 1983：79）このような動詞の項はDAの表示を持たないものである。

19) ankommen (θ^S) -- tanzen ($\underline{\theta}^S$)

語彙登録(lexical entry)の段階でこのような項の構造を示すことによって、即ち、DAの存在の有無が示されることによって、動詞の統語上の振る舞いがより明確にされよう。

2. 項をブロックする、ブロックを解除する／Partizip Ⅱ・zu・haben・seinの役割

Haiderは(1984[1])で、過去分詞(Partizip Ⅱ＝PⅡ)、zu、haben、seinはそれが存在するコンテキストでは、項をブロックし(具現を妨げ)たり、そのブロックを解除するなどの働きをする要素であると捉えている。これらの要素はhabenを除けば、werdenと共に受身文をつくる際に用いられる要素でもある。

結論から述べると次のようにまとめられる。

a) PⅡはDAをブロックする。

b) zuはexternes Argumentをブロックする。

c) habenはブロックされた項を解除する。

d) seinはブロックされた項を解除する働きがない。

以下Haiderにならって説明する。次にあげる動詞はそれぞれ( )で示される項構造、θ-構造を持つものとする。定形節はその右側に示してある。

20) ankommen	(θ^S)	Der Gast kam an.	(客がきた。)
21) tanzen	($\underline{\theta}^S$)	Der Gast tanzte.	(客が踊った。)
22) helfen	($\underline{\theta}^S$, θ^L)	Der Gast half dem Kind.	(客が子供を助けた。)
23) lesen	($\underline{\theta}^S$, θ^S)	Der Gast las das Buch.	(客が本を読んだ。)

〔 PⅡの働き 〕

それぞれの動詞のPⅡは付加語形容詞的な用法を持つ。しかし次の例で明らかなように、20)のPⅡが主語連関(Subjektbezug)の名詞を許容するのに対し他のPⅡは目的語連関(Objektbezug)の名詞を許容する。即ちこのPⅡが存在するコンテキストでは、($\underline{\theta}$)で表示されているDAは具現できないことが分かる。

24) der angekommene Gast	(到着した客)
25)*der getanzte Gast	(踊った客)
26)*der dem Kind geholfene Gast	(子供を助けた客)
27)*der das Buch gelesene Gast	(本を読んだ客)
28) das (von dem Gast) geholfene Kind	(助けられた子供)

29) das (von dem Gast) gelesene Buch （読まれた本）

この現象はPⅡがKopulaと用いられたコンテキストでも同一である。48)-53)を参照。

30) Der Gast ist angekommen.

31)*Der Gast ist getanzt.（*Subjektbezug）

32)*Der Gast ist geholfen.（*Subjektbezug）

33)*Der Gast ist gelesen.（*Subjektbezug）

34) Dem Kind ist geholfen.（Objektbezug）

35) Das Buch ist gelesen.（Objektbezug）

以上の例からPⅡによってDAがブロックされていることが理解される。

一方Partizip I（PI）それ自体にはブロック作用がない。

36) der ankommende Gast（到着する客）

37) der tanzende Gast

38) der dem Kind helfende Gast

39) der das Buch lesende Gast

〔zuの働き〕

zuと共に用いた場合を見よう。zuはzu＋PI、sein＋zu＋Infinitiv、haben＋zu＋Infinitivなどのコンテキストで用いられる。先にPIにはブロック作用がないと述べたがzuが存在すると事情は異なる。zu＋PIの付加語形容詞的用法と、sein＋zu＋Infinitivの用法とを比較してみる。

40)*der anzukommende Gast（到着すべき客）

40')*Der Gast ist anzukommen.

41)*der zu tanzende Gast

41')*Der Gast ist zu tanzen.

42)*der dem Kind zu helfende Gast

42')*Der Gast ist dem Kind zu helfen.

43)*der das Buch zu lesende Gast

43')*Der Gast ist das Buch zu lesen.

44) das zu helfende Kind（助けられるべき子供）

44') Dem Kind ist zu helfen.（子供は助けられなければならない）

45) das zu lesende Buch

45') Das Buch ist zu lesen.

44)～45')は受動内容の句あるいは文である。40)ではankommenに1つだけ備わっている構造的項が具現されて非文となる。また41) 42) 43)では、DAとなっている構造的項が具現されて非文となる。上の対照で共通しているのは、定形節では主語（Nominativ）として具現する項（構造的項）が、zuの現れるコンテキストでは具現されないということである。[6)]

PⅡによるブロックとzuによるブロックでは、その対象とブロックの仕方に違いが認められる。PⅡは語彙的にdesignierte externe Argumenteをブロックするのに対して、zuの場合、統語的にexterne Argumenteをブロックする（Haider：1984[1]）。

〔 habenの働き 〕

次にhabenの場合、完了文で、またzu＋Infinitiv と共に用いられても、共起する本動詞の項がすべて具現することになる。

46)*Der Gast hat angekommen.　　46′) Der Gast hat anzukommen.

（助動詞選択の誤り）

47) Der Gast hat getanzt.　　47′) Der Gast hat zu tanzen.

（客はおどった）　　（客はおどらなければならない）

他の例を省くが、31)と47)、40′)と46′)・47′)とを比較すると顕著に見られるように、PⅡでブロックされる項(DA)、ならびにzuでブロックされる構造的項が具現されている。このことから”haben”はブロックした項を解除し具現させる働きを持つとする。

〔 seinの働き 〕

habenはPⅡやzuによってブロックされたDAや構造的項を解除するが、解除という観点では、seinはその働きを持たない。

48) Der Gast hat das Buch gelesen.

49) Das Buch ist gelesen.

50) Der Gast hat das Buch zu lesen.

51) Das Buch ist zu lesen.

habenはPⅡ（gelesen）やzuによってブロックされた項を主語として具現しているが、一方、seinコンテキストではブロックされたまま具現されない。つまり、sein＋PⅡ、sein＋zu＋Infinitivの項として存在できないことになる。つぎの例も、ブロックされた項をseinは具現する働きを持たないということを示す。

52)*Der Gast ist das Buch gelesen.

53)*Der Gast ist das Buch zu lesen.

seinについてブロック解除の働きをしないと述べたが、30)、34)、35)、44′)、45′)、及び49)、51)から分かるように具現する項は、すべてinternな項である。従って、ブロック解除の働きはしないが、internの項を具現する働きがseinに認められる。

ブロック・解除によって、不適格文を説明する。(Haider：1986, 12ff.)

54)*Ihm hat zu helfen.　　54′) Ihm ist zu helfen.

55) Ihm hat geholfen zu werden.　　55′)*Ihm ist geholfen zu werden.

54)では、zuがhelfenの2項($\underline{A_1}$, A_2)のうち、A_1をブロックし、hatはそれを解除しているにもかかわらず、解除された項のNPの担い手が存在せず、θ-基準に違反する。54′)では、istがA_1を解除しないままにしており、A_1(DA)はzuによってブロックされている。

55)では、geholfen zu werden hatの順でみることにする。ここでは、PⅡはDAをブロックし、zuはwerdenをブロックし、hatがzuのブロック作用を解除する。結局zuとhabenが相互に作用しあい、geholfenのブロック作用だけが生きることになる。A_2が適性にθ-役割を担って具現している。

一方、55′)では、PⅡがDA(A_1)をブロックし、zuはwerdenが具現する要素(A_2)をブロックし、更に、istは解除作用を持たないのでihmには、θ-役割が備わっていない。θ-役割の備わっていない項は具現できない(θ-基準に違反し非文となる)。なお、werdenにはブロック作用を認めない。seinと同様具現できる項を引き受けてそのまま具現させる働きを持つ。55′)では、同一コンテキストに、seinとwerdenの同じ役割を持つ2つの要素(動詞)があり、このような場合、つまり同一機能反復は非文になる、とする。次のmodalがくり返される例でも非文であるとする。
(Haider：1986, 14ff.)

56)*Er hat zu helfen zu haben.

以上、ブロックということについて、ブロックされる項、ブロックする要素、ブロックを解除する要素などについてのまとめとする。

3. 受動の定義

受動態(文)について構文とその例が次のように示される(Haider, 1986：5)。

57)

a) ergativierte Verben　　a′) Der Schnee schmilzt. (Die Sonne schmilzt den Schnee.)

b) werden＋PⅡ(動作受動)　　b′) Der Schnee wird geschmolzen.

c) sein＋PⅡ　(状態受動)　　c′) Der Schnee ist geschmolzen.

d) sein＋zu＋Infinitiv　　d′) Der Schnee ist zu schmelzen.

e) Medialkonstruktion　　e′) Schnee schmilzt sich leicht.

例示した動詞schmelzenは、2つの構造項を持つ他動詞である。a)が示しているのは、例文の

主語がもともと、この他動詞の「論理的目的語」であり、従って「論理的主語」を欠いた構成の動詞として用いられ、受動の解釈を受けるということである。「論理的主語」を欠き「論理的目的語」を主語に据えることによって自動詞と同様に行動する動詞をergativierte Verben（アーガティブ化した動詞）としている。この動詞は、20）で示した動詞と同じ行動をする。

再帰代名詞sichを用いたMedialkonstruktion（M-Sich＝M-S） 57 e）については、Haider（1985）で詳しく分析されている。57 e'）の主語Schneeは、2項をとる動詞schmelzen, V:（$\underline{\theta}$, θ）の2番目の項、即ち「論理的目的語」である。従って 57 a'）同様自動詞的受動の解釈を受ける。ただし前方照応（anaphorisch）の再帰代名詞とは違って、M-SはReferenzになっていないのでSchneeを先行詞としない。M-Sの担う役割について、次のように理解される。この構文では、論理的主語を任意に（von・・の形で）加えることができない。しかし文中の語彙のどれかがその「論理的主語」、即ち、AGENSという θ-役割を担う可能性を考え、それをsichが引き受けているとしている。θ-役割を担ってはいても、項位置をひきうけない要素（$\overline{A}$）と見なす。

ブロックとのかかわりでみると、PⅡ、zuを用いた場合、及び 57 b'）、57 c'）、57 d'）では、DAがブロックされて受動文が作られている。また、アーガティブ化した動詞、Medial構文でも、DAが脱落しているのが分かる。

Rezipientenpassiv（Helbig／Buscha：184＝1.8.10.1）は、bekommen, erhalten, kriegen とPⅡとの組み合わせで構成される受動文である。表面的特徴はbekommen などの主語がPⅡになっている動詞の間接目的語という点である。例えば、文58）に対応する受動文59）では、間接目的語の格変化は起きない。語彙的項なのである。

58） Ihm schenkte Anna ein Buch.

59） Ihm wurde ein Buch geschenkt.

一方kriegenを用いると、語彙的項である間接目的語は格を変え1格主語にならなければいけない。

60)＊Ihm kriegte ein Buch geschenkt.

61） Er kriegte ein Buch(von Anna) geschenkt.

また、間接目的語をとる動詞でも、helfen のような自動詞にはこの構文は用いられず、他動詞に限られる（Haider, 1986：5）。[7)]

62)＊Er kriegte geholfen.

さて61）にみられるように schenken の主語のAnnaは、任意に前置詞を伴って表されるものの、決して必須の項ではない。 schenken の項構造は次のように示されることから、

schenken, :V（$\underline{\theta^S}$, θ^L, θ^S） 、 （$\underline{\theta}$）＝DA

受動文59）でも、また61）についても、やはりDAが脱落しているのが確認されよう。Haiderによ

れば、受動は広義の受動概念と狭義の概念で定義される。

63) 受動（広義）：受動とは、項が減少するコンテキスト（Reduktionskontext）を形成し、その減少項がDAであるような構文である。

64) 受動（狭義）：受動とは、形態論上一義的にコード化したDAの減少過程である。
（狭義ではドイツ語の受動は werden と PⅡで構成される。）

4. 準助動詞 bekommen, erhalten, kriegen (Haider, 1986: 19ff.)

bekommen, erhalten, kriegen などは、動詞のPⅡと共に用いられて受身の文を構成する。一見受動の助動詞のwerdenと同じ受動助動詞の仲間とも見なされそうである。またこの3つの動詞は、zu＋Inf. と共に用いられ（・・・しなければならない、・・・できる、・・・させてもらう、などの意）、その用法は、haben＋zu＋Inf. 構文での haben に似ているように思われる。そこで、Rezipientenpassiv で用いられる3つの動詞について分析することになる。

さて θ-役割は、助動詞構文であっても、そこで用いられている本動詞の持つ θ-構造が支配するのであって、助動詞が本動詞の θ-役割を勝手に変えることはないと考えられる。

65) Er hat ein Buch.　　66) Er hat ein Buch gelesen/zu lesen.

文66)の助動詞構文においても、本動詞の θ-構造それ自体に変化はない。つまり構成項にそれぞれ与えられる（AGENS），（THEMA）のような θ-役割と構造的項は不変である。従って 助動詞habenは θ-役割に対する独自の制限をせず、また独自の θ-構造も持たないと考えられる。一方、kriegenなど（kriegenを代表とする）を用いると、それが本動詞の場合も助動詞の場合にも、本動詞としてのkriegen が持つ θ-構造をそのまま充てていると考えられる。

67) Er kriegt etwas.　　68) Er kriegt etwas geschenkt.

schenken の間接目的語（到達点-ZIEL-という θ-役割を持つ）が格を変えている、ということが、haben とは異なるなんらかの θ-制約をしているということであろう。

また、助動詞の選択（完了）にも特徴がある。受動文の完了では、普通 seinが選択されるが、kriegenなどではhabenが選択される。

69) Ihm wird ein Buch geschenkt.　　69') Ihm ist ein Buch geschenkt worden.

70) Er kriegt ein Buch geschenkt.　　70') Er hat ein Buch geschenkt gekriegt.

71) *Er ist ein Buch geschenkt gekriegt.

助動詞 haben にブロックを解除する働きがあったが、この kriegen が haben 同様の助動詞として機能するならば、DA が解除されて具現してもよさそうなものであるが、そうではない。このような事実から助動詞としての kriegen は独自の θ-構造を持ち、しかも、DA を持つという推論がたてられる。

kriegenのθ-構造がPⅡのθ-構造に寄生する／parasitäre Verben（Haider, 1986：21）

kriegen の θ-構造と schenken のそれとを比較すると重なり合う構造であることが分かる。

72) kriegen：V(<f_1, ZIEL>, <f_2, THEMA>　(f_1, f_2：構造的))

73) schenken：V(<f_1, AGENS>, <f_2, ZIEL>, <f_3, THEMA>
(f_1, f_3：構造的；f_2：(DAT)不変))　　f ＝DA

61) 62)から理解できるように、kriegen, bekommen, erhalten は θ-構造が一致する動詞（過去分詞）とだけ共起する。しかし θ-構造は重なっているにしても、格の具現にかかわる格メルクマールは一致していない。kriegen, bekommen, erhaltenはDAの主語に＜到達点＞というテーマ機能を持つ。これは他の動詞でなら間接目的語（Dativ）で示されるものである（73）。またこの3個の動詞はいずれも他動詞である。

Haiderはここでkriegenのもう一つの用法、即ち、zu Infinitiv をともなう用法と比較しながら、ブロックと解除の面から、統語的側面をも解明している。（Haider, 1986：22）

74) Er hat etwas zu tun.

75) Er kriegt etwas zu tun.

76) Ihr wurde ein Preis verliehen.

77) Sie kriegte einen Preis verliehen.

78) Jemand hat ihr einen Preis verliehen.

79)＊Jemand kriegt ihr einen Preis verliehen.

ブロックには語彙的なものと統語的なものとがあった。PⅡによるブロックは語彙的で、zuによるブロックは統語的である。74)、75)ではzuによる統語的ブロック（統語的にブロックされた動詞）をhaben/kriegen が活性化している（ブロックの解除を行う）。一方77)、79)では、PⅡによる語彙的ブロック（DAのブロック）が解除されない。RPによれば構造的項はexternに具現することが定められていて、助動詞sein/werden 共に具現を妨げない。しかし kriegen の主語はPⅡのDativ 目的語でありRPによる具現では説明されない。即ち、kriegen＋PⅡには RP は有効ではない。

ところでブロック解除が目標にするのは、以下の3点とされる。なお項には、格メルクマールとθ-役割とが対になって付与されている。

a) ブロックされた対が全体として活性化(解除)される。

b) 格メルマールが活性化される。

c) θ-役割が活性化される。

助動詞は、あるNPに格メルクマールが具現することを許し(=b))、これによって対応するθ-役割がそのNPに付与される、結果として a)になるという過程が一般的パターンと考えられる。これとは逆に c)から始まるパターンをkriegenに求める。

動詞要素は格メルクマールを持っているものとし、しかし定まった特別のθ-役割は持っていない。このθ-役割は、動詞要素が同じ動詞複合体(Verbalkomplex)内の他の動詞から受け取る。従ってθ-構造には、一方の項要素部に格メルクマールはあるがθ-役割は入っていない構造を想定することになる。

80) V($<f_1, \underline{e}>< f_2, e>$)($f_1, f_2$:構造的)

"$\underline{e}$"で示されるようにθ-役割は潜在的(virtuell)なものである。またこのθ-構造は同一の構造を含むPⅡ-このPⅡから当のθ-役割を受け取る-に寄生している。

もしθ-役割が受け取られず格メルクマールが具現してしまうと、θ-役割の一致はなくなる。kriegenがzu+Infinitivと用いられる場合(75)である。不定詞の主語(externes Argument)がkriegenの主語と一致する。ここでは、不定詞主語のθ-役割(AGENS)がkriegenの主語のθ-役割に転写されていない。

kriegen, bekommen, erhaltenの3個の動詞は助動詞として用いられる場合、独特の振る舞いがあり、それは特別のθ-構造を想定することによって解明される。

以上ブロックをしたりあるいはブロックを解除する現象や、それにかかわる要素にふれながら、

受動とは、統語的に項(DA)の脱落(減少)によること、

Rezipientenpassiv は寄生動詞をともなった項脱落(減少)構文であること、

その寄生動詞はexternな項がZIEL(到達点)というθ-役割を持つものであること、

など、受動一般について、またRezipientenpassivについて統語的メカニズムが明らかにされてきた。

5. まとめに代えて

kriegen, bekommen, erhaltenを用いたRezipientenpassivの分析にはかなり特殊なθ-構造をたて、格付与とからめ、ブロック・ブロック解除などと合わせて説明する羽目になっているが、このいささか複雑とも思える手順によって、意味的側面-kriegenの主語がPⅡの間接目的語と同一のθ-役割を持つ-と、統語的側面との関連が総合的に分析されていると考えられる。最近

の生成文法が意味的側面も統語論に取り込んで扱うことが可能になった、つまりより充実してきたということによるのでもあろう。動詞の構成項の θ-構造、項構造をとらえることによって、伝統文法では羅列的に説明されている受身文について、統語的に全般的に把握し直し、普遍的な説明が可能ならば、言語現象を説明する有効な方法論となろう。

ここでとられた方法論は、受動文は能動文から変形によって導かれる、という見解ではなく、受身文にはあくまでも受身の動詞を認めるという立場でのアプローチであると考えられる。

Haiderは更に動詞群(komplexe Verbgruppe)をとりあげて、Rezipientenpassivで想定したようにいくつかの θ-構造を想定し、方法論上の一般化を行っているが、拙稿では Rezipientenpassivに限ってとりあえずの紹介とする。

注

1) Deutsche Grammatik(1986), 1.8.10., S. 184ff. 参照。"Adressatenpassiv", "indirektes Passiv"とも呼ばれる。

2) この3つの動詞については、木藤(1980、『エネルゲイア』)が意味論の観点から詳しい分析を行っている。PⅡを伴う構文については分析していないが、この構文の場合もその現れ方は木藤の図示した型にあてはまる。erhalten(以下 e.)は現れ方に制限があるが、bekommen(以下 b.)とkriegen(以下 k.)は相互に置き換え可能である。　?:容認度が低い、*:容認されない。

Ich b./ k./ e. die Schulden erlassen.

Ich b./ k./ ?e. ein Kleid genäht.

Ich b./ k./ *e. den Brief von meinem Chef diktiert.

Ich b./ k./ *e. widersprochen/gratuliert.

a) Ich b./ k./ ?e. das Glas gewaschen.

インフォーマントチェックではa)のようにerhaltenの容認度が低いとされたが、次の b)では、

b) Ich b./ k./ e. von der Mutter seine Hände gewaschen.

容認されるとの一応の結果を得た。更に吟味する必要があろうが、このチェックに従えば gewaschen との共起に微妙な違いが存在すると考えられる。b./k./e. 三者の意味的な違いが 所有の移動〕、〔状態の変化〕、〔結果性〕という基準で類別されるにしても、a), b)のe. についてはそれだけでは説明しきれないと考えられる。今後の課題としておきたい。

3) Haiderはこのような(expletivの)esはCOMP位置に立てている。Haider(1985[1]:10)参照。

4) 統率:もし(i) αがβをc-統御し、かつ(ii)βを支配する最大投射がどれもみなαをも支配して

いるならば、αはβを統率するという。ただしαは語彙範疇（N,V,A,P），AGRに限る。（主要部がその補部にたいして持つ関係を捉えようとしたもの。最大投射は語彙範疇の最大投射（NP，VP，AP，PP）のほかに、S′も含む。）

c-統御：2つの節点a,bがいずれも他を支配せず、かつ、aを支配する最初の枝分かれ節点がbを支配するならば、節点aはbをc-統御するという。

5) ergative Verben（アーガティブ動詞）については、池上（1981）を参照。Haiderはankommen など、完了でseinをとる動詞類をアーガティブ動詞に分類している。「アーガティブ」についての断りがないがHaider にならうこととする。なお10)から15)の構成は形容詞でも同様に見られ（例：jm treu sein)、また形容詞が構造的項を最大で1つしかとらないことなどから、形容詞もアーガティブであるとしている。（Haider、1983）。

6) 次の文で、zu＋Inf.は埋め込み文と分析される（Haider，1986：9）。

Der Gast versucht zu tanzen. 〔Der Gast versucht〔PRO zu tanzen〕〕

tanzenの主語はzuによりブロックされ具現しない。PⅡ/zu＋Inf.と用いられるsein/habenは助動詞（AUX）であり、同一のS内にある。versuchenは本動詞扱いとなる。

7) 実は参考文献中のWEGENERの論文の題目にもあるように3格目的語をとる自動詞、jm widersprechen, も可能である。69) 70)で示されるようなものと同じθ-構造を想定することはできないが、3格目的語のθ-役割がkriegen（＜ZIEL＞）と重なり合うことから可能になるのかも知れない。

参　考　文　献

CHOMSKY, N.　（1981）：Lectures on Government and Binding. Dordrecht：Foris.

HAIDER, HUBERT（1983）："The Case of German". Groninger Arbeiten zur Germanistischen Linguistik 22:47-100（=Studies in German Grammar(Studies in Generative Grammar 21) 66-101, Jindřich Toman(Hrsg.)Foris Publications 1985）

HAIDER, H.　（1984）："Mona Lisa lächelt stumm - Über das sogenannte deutsche 'Rezipientenpassiv'". Linguistische Berichte 89:32-42.

HAIDER, H. (1984[1]): "Was zu haben ist und was zu sein hat – Bemerkungen zum Infinitiv." Papier zur Linguistik 30: 23-36.

HAIDER, H. (1985): "Von 'sein' oder nicht 'sein': zur Grammatik des Pronomens 'sich'". Erklärende Syntax des Deutschen(=Studien zur deutschen Grammatik, 25), 223-254.

HAIDER, H. (1985[1]): "A Unified Account of Case and θ-Marking". Papier zur Linguistik, 32:3-36.

HAIDER, H. (1986): "Fehlende Argumente: vom Passiv zu kohärenten Infinitiven". Linguistische Berichte 101: 3-33.

HELBIG/BUSCHA(1986): Deutsche Grammatik. Enzyklopädie Leipzig.

REIS, MARGA (1985): "Mona Lisa kriegt zuviel." Linguistische Berichte 96:140-155.

SELLS, PETER (1985): Lectures on Contemporary syntactic Theories. Center for the Study of Language and Information. Stanford.

WEGENER, HEIDE(1985): "Er bekommt widersprochen." Linguistische Berichte 96: 27-139.

池上 嘉彦(1981):『「する」と「なる」の言語学』、大修館

木藤 冬樹(1980):「Kollokation による類義語分析 1979[1]」、『エネルゲイア』6号、74-96頁。

毛利 可信(1986):「伝統文法からみた生成文法」、『言語』、Vol. 15, No. 12.、大修館、134-140頁。

(北海道薬科大学講師)